郵便脚夫などに聞いてもあるさうでございます

黃尾島（承前）

理學士　宮島幹之助

（未完）

第五章　動物

前に屢言へる如く、本島は黑潮の流中に介在するを以て、魚族の群集又少からず。表遊魚には「カツヲ」(Thynnus pelamys, C. & V.)「シイラ」(一名マンビキ)(Coryphaena hippurus L.)あり。予等在島間、食卓に屢上りしは即ち此魚なり。其他沿岸淺處に限らるゝ魚類數種を認めしも、其種名を詳にせず。島の根には珊瑚族發育し、恰も噴出岩の巨塊を石灰にて結合したるの觀あり。汀邊に至りて見れば、岩隙は深く、或は淺くして碧水を滿たし、小潭をなす。其四壁には Astraepora, Meandrina 等の多放射珊瑚の一面に着生するあり、種々の色彩の水螅は伸出して、五色の池をなす。少しく深き底には Madrepora の褐色の水螅を出すあり。退潮の後更に新なる水の此潭池に注き來るあれば、無量の水螅は一時に出揃ひて、紅紫綠青の百花の咲きたるが如く、實に自然界の美を茲に集めたるの觀あり。岩隙の間には扁平なる甲を有する蟹の一種 Platygrapsus, depressus, Stimpson（此種は鹿兒島縣下の南部海岸に多し）の横樣に疾走するあり。珊瑚塊を破壞すれば、種々の部門に屬する微細なる動物の蠢蠕として出て來るを見る。尤愉快なるは珊瑚に寄生する小蟹類にして、其種類の多きと、其色彩の多樣なるとは、實に驚くに余りあり。珊瑚の色と、之に寄生する蟹の躰色とは、實に能く類似して、保護色の一好例たり。殊に Seriatopora と稱する珊瑚は、樹枝狀をなし、其枝端細く諸處に恰も樹木の枝梢に見る沒食子の如き球体あり。精細に檢するに球狀の膨らみに二小孔ありて、此中に小蟹住居するなり。此蟹は終生此中に留まりて、外に出つることなし、試に之を出し檢すれば、其甲は極めて軟くして、此の如く充分なる保護物の中にあらざれば棲息する能はざるものの如し。本邦内他の海濱には容易に見得可からざる赤色の「クダサンゴ」(Tubipora musica, (L.))は、水の足を沒するに至らざる位の淺處に簇生し、其水螅或は縮み、或は長く伸出して、羽狀の八觸手の開ける狀又實に一偉觀たり。此の如く珊瑚族の多きに係らず、本邦の近海沿岸に普通なる「イソキンチャク」類の少きは、著しき事實にして、予は遂に一も發見する能はざりき。

岩礁の表面及び下には、大小種々の螺類あり。Patella の偉大なる者は波浪烈しき岩面に着生す。又岩上に着生する者の中、一種の「カキ」(Ostrea sp.)甚だ多し。此種は本邦内地產の種類とは全く異る者にして、小笠原島の「カキ」と同種なり。（學友脇谷洋次郎氏の鑑定による）尙汀を離れ五六尋の深き處には「ヤクカヒ」(夜光介)(Turbo olearius, L.)可なり多く棲息す。此介殼は質美麗なるを以て、磨きて種々の器具に製せらる。海外輸出品の一なれば、又以て本島の一物產とするに足る。

島上は植物の少からざると共に、絕海の孤島の割合には、比較的昆虫類に富めり。最吾人の多く